

# 月曜評論

「ドミノの駒を立てて一列に並べる。末端の駒を倒せば、その衝撃で駒は次々と倒れ、またたく間に最後の駒まで倒れてしまふ」

アジアの冷戦構造が定着しつつあった一九五四年に、当時のアイゼンハワー米大統領が語ったドミノの駒のたとえは、いわゆるドミノ理論として、アメリカのアジア政策、反共封じ込め政策の基調をなしてきたものであった。それだけに、ドミノ理論にたいしては批判も多かった。アメリカがニクソン・ドクトリン(一九六九年)によってアジアからの軍事的撤退の方向を明らかにしたからは、ドミノ理論は冷戦時代の亡霊として忘れ去られようとしていた。ところが、最近のインドシナ情勢の急変以来、わが国では、悪名高きドミノ理論が復権したかのようだ。「危機」の運動性が叫ばれ、「次は朝鮮半島か」といった議論がセンセーショナルにもてはやされている。たしかに、ベトナムと朝鮮半島では、多くの共通性があり、インドシナ情勢が急変した直後には金日成首相一行が訪中し、「武装南進」の可能性を示唆するような演説さえおこなった(四月十八日)。一方、こうした状況に直面した韓国では、反共・韓力安保の国民総動員体制が急遽(きょく)形成され、朝鮮半島の緊張はとみに高まっているかに見える。

※……※……※

だが、事態を冷静に分析してみると、まず第一に、東北アジアでのソ連の影響力の拡大を懸念し、米中関係の現状維持を必要とする立場にある中国は、朝鮮半島が第二のベトナムになることを今日望んではいないし、米ソ両国も朝鮮半島のバランス

を崩そうとは考えていない。第二にはベトナムと朝鮮半島との共通性にもかかわらず、アジアの三十年戦争を長期抗戦によって遂行したベトナムと朝鮮戦争

## インドシナと朝鮮

アメリカのアジア防衛ラインはいまや太平洋上に移行し、アメリカの立場は選択的防衛条約の立場へと変化したとはいえ、直接攻撃にたいしては強力で報復するといふ抑止力を韓国にたいしては依然として放棄していない。シェリンジャー米国防長官が去る六月二十日の記者会見で韓国に戦術核が配備されていることを認めたことも、それを裏づけている。

※……※……※

このように見れば、ドミノ理論的な「危機」の運動性のみを強調するとは、逆に韓国内政の強権化を促進することに



中嶋 嶺雄

さすつながら、かえって朝鮮半島の緊張激化に貢献することに

私は、この六月初旬、東南アジア訪問の帰途、板門店の非武装地帯をも訪れ、その日のうちに帰国した。これほど近くこの

の意味を再認識せざるを得なかったし、つい先日までは反朴運動の担い手であったリベラルなジャーナリストや学生たちまでが強い危機意識によって反共・総力安保の総動員体制に参じているところに朝鮮半島の悲劇の根を垣間見た思いであった。しかし、われわれとしては朝鮮半島の平和がもう意味の大きさを痛感するがゆえに、事態をあくまでも冷静に分析してゆかねば

一方、インドシナ半島に眼を転ずると、インドシナ解放の中核が北ベトナム正規軍であり、その前衛がベトナム労働党であったことが次々に明白になりつつある。中国は、このようなインドシナ人民勝利への連帯を強調し、「農村から都市を包囲する」手次東路線の正しさがインドシナでも証明された旨を誇示しているが、周到にもベトナム側は、そのたびごとにソ連をはじめとする他の社会主義国の支援にも言及すると同時にベトナム人民の主体性をあくまでも示さざるを得ない。

※……※……※

「農村から都市を包囲する」という戦術がある。しかし、われわれはこの手段をとらなかつた。いきなり中心をたたく戦術をとる方がよいと判断した」と語って、ハノイが毛沢東路線を排したことを明らかに訴えてさえる。インドシナ半島の将来と今日の中ソ対立の深刻さを考えれば、ベトナム戦争での勝利は中国にとって「一九四九年に中国で共産党が勝利した結果、スターリンが直面した問題と同じ問題を投げかけている」(英「タイムズ」一九七五年六月九日付社説)といえるのかもしれない。このようにインドシナ半島の将来には、それなりの複雑な問題が生じつつあるのであり、この点からしても「危機」運動性のみを単純に強調することは適切でない。

対日重視と日米関係の強化を呼びかけたキッシンジャー演説、いわゆる「朝樞」問題をめぐる日中ソ関係なく、わが国の国際関係がきわめて重要な段階にあるだけに、われわれはいま、アジア情勢の急変と再編の過程をじっくり見とめてゆかねばならない。

(東京外語大教授)